

高校国語教育

2015年(夏)号

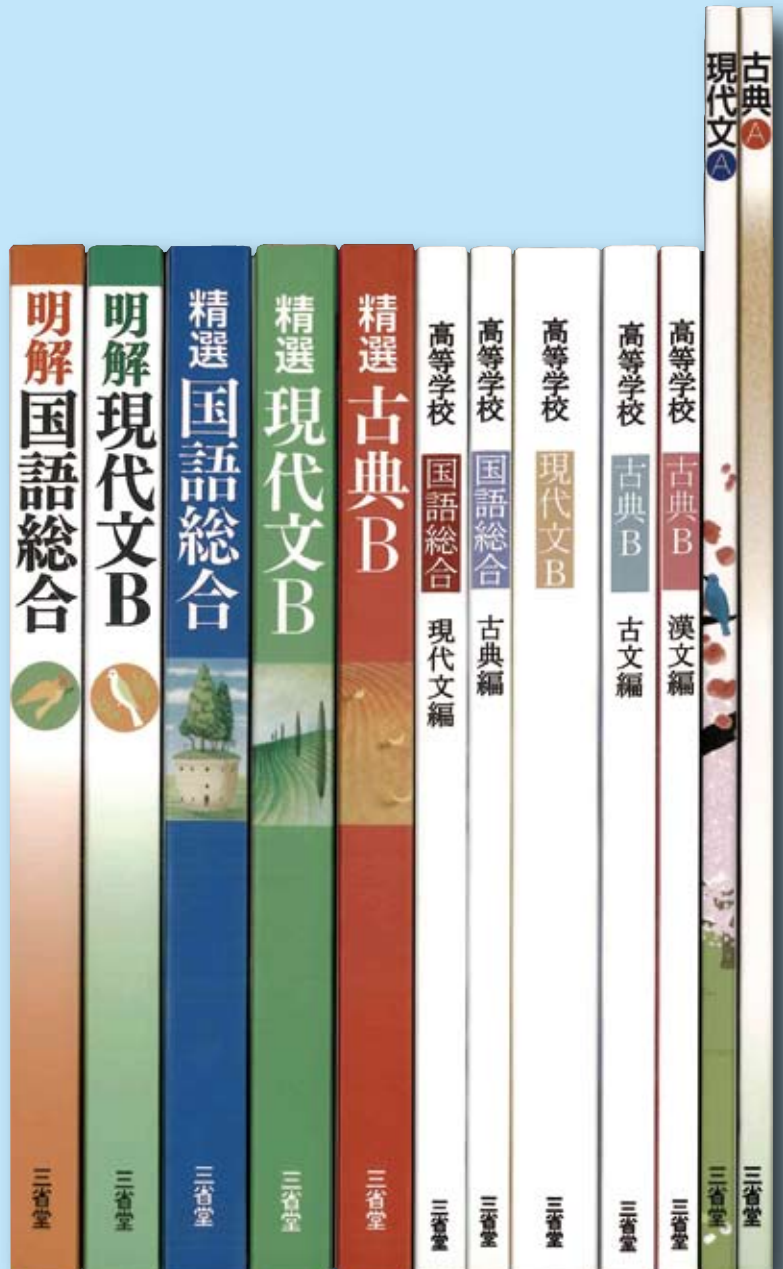
三省堂

巻頭エッセイ
小川洋子

特集
文学教材で
何を教えるか

古典指導のヒント

「伝える」を「伝わる」に



高校国語教育

2015
年夏号

目次

巻頭エッセイ 小川洋子……………1

特集 文学教材で何を教えるか

美しい小説 — 小説が教材になるまで — 安田正典……………2

抽象的思考につなげる文学教材指導 若松伸哉……………4

詩の〈行〉を読む — 萩原朔太郎「旅上」 — 戸塚学……………6

お気に入りの一首を見つけ、それについて熱く語る授業を 千葉聡……………8

古典指導のヒント

「友情」のあり方から読む「木曾の最期」 小助川元太……………10

身近な事柄に引き付けて — 漢文指導のヒント — 瀧康秀……………12

「伝える」を「伝わる」に — 全国高校ビブリオバトル二〇一四 澤口哲弥……………14

出合いの種

小川洋子

毎週一冊、とあるラジオ番組で本を紹介するようになってから七年以上になる。取り上げてきた四百冊近い本のなかで、番組史上スタジオが最も盛り上がったのはたぶん、田山花袋の『蒲団』だろう。

自然主義文学の出発点となり、日本文学史を変えた作品として国語の教科書に必ずタイトルが載っていた『蒲団』。テストの問題にもしばしば出てきた。さぞかし格調高い小説なのだろう。花袋、という名前もどことなく雅な感じだ……、と高校生の頃からずっと勝手に思い込んでいた。ところが、実際に読んでみたら、予想とは大違いだった。自意識過剰で自分勝手な、ダメ男小説だった。

主人公の作家、時雄は若く美しい女との恋を夢見ている。夢見るだけなら可愛いが、妊娠中の奥さんが難産で死んでくれたらいいのに、と願ったりしている。そこに文学を志す女学生、芳子が弟子入りしてきたものだから、時雄の妄想は更なる暴走をはじめ。芳子を美化し、理想的な恋の予感に心躍らせ、勝手に嫉妬

し、手紙を盗み読みして偉そうに説教する。自分の妄想どおりに事が運ばないと、奥さんに八つ当たりしてお膳をひっくり返す。さらには、芳子の処女性に疑いを持った挙句、彼女を蔑み、自分が先に手を出すべきだったというとんでもない腹の立て方をする。

最初、時雄の歪んだ心根に腹を立て、いちいち突っ込みを入れていたスタッフたちも、あまりに正直な描写にあきれ、だんだんとおかしくなってきた。怒りがばかばかしさに転換し、ここまであからさまに自らの卑しさをさらけ出す時雄に、親しみさえ感じるようになった。そして有名なラストシーン、芳子が使っていた蒲団の汚れに顔を押し当て、時雄が泣くところでは、同情まじりの笑いがこみ上げてくるのを、抑えられないのだった。

日本文学とは、何て面白いのだろう。素直にそう思う。高校卒業後三十年以上たち、『蒲団』を読む機会があつて本当によかった。教科書の中には、そんな出合いの種がたくさん隠れている。(おがわ ようこ・作家)

特集 文学教材で何を教えるか

美味しい小説 — 小説が教材になるまで —

安田正典

すぐれた料理人のように

すぐれた料理人のように、素材の味を活かし、食べる人の口に合う程よい大きさで、甘いものは甘さを、苦いものは苦さを、硬いものは硬さを、軟らかいものは軟らかさを失わぬように、程よく手を加え、美味しい小説を、香りもそのままに生徒の前に差し出したいと、常々思っている。そして、できればその小説を、厨房から漂ってくる匂いに引きつけられた子どもたちが期待のソースを準備して待つように、私たちの教室の生徒達もまた、待ち受ける未知の味に胸ときめかせて、お腹すかせて待つようでありたいと思っている。どうすればそんな料理を生み出せるか。どうすればそんな料理人に

なれるか。

なぜ自分はその小説に惹かれるのか

なぜ自分はその小説に惹かれるのか

— 私の料理人への道はいつもこの問いから始まる。他の小説ではない、その小説の魅力を解き明かさなければ、美味しい小説の授業はできない。そして、その小説の魅力、面白さを解き明かすためには、一読者としての私の感じ方を徹底的に追究しなければならぬ。好みも含めて、私は私自身を知らなければならぬ。そうでないと、私は私を、その小説を面白く感じると、私は私を、その小説を面白く感じる私を生徒達に語る事ができない。そして、私が私を語る事ができなくて、どうして生徒達とその小説の面

白さについて語り合うことができるだろう。考えてみれば、わがままな道ではある。しかし、料理人の道は、栄養士の道や食品分析の道とは違うはずだ。もちろん分析的視点は欠かすことができないが、分析だけでは美味しい料理は作れない。料理人は自分の舌を信じるものだ。舌を信じ、舌の言葉を知らなければならぬ。まず自らに問いかける。なぜ自分はその小説に惹かれるのか。その小説の面白さはどこから生まれるのか。以下、教科書に取り上げられている小説を例に挙げて、一読者としての私の感じ方を提示し、本稿の読者の参考に供したいと思う。

角田光代「ランドセル」の場合

角田光代の「ランドセル」は、主人公（二十七歳の「私」）が、幼稚園児の頃の自分を回想し、その頃の自分と対比する形で現在の自分について語る小説である。内容的には難しいところのない、謂わば「二読で内容を理解できる小説」である。この手の小説は厄介である。「分かり易すぎる」からだ。一見、何も教えることがないように見える。だが、本当にそうか。私は、そうは感じなかった。そこで私は次のようにこだわってみた。

この小説の面白さは、「子ども」はまだ物事がわかっていない存在であり、「大人」はわかっていながら存在であるという世の中の常識を逆転させ、「子ども」は「大人」が思っている以上に自分のことも周囲のことも「わかっていよう」ものだし、「大人」は自分で思っているほど「わかっていない」ものなのだ、少なくとも自分はそうだった、という語り方のユニークさにある。(対比)は細部に及び、徹底している。そこにこの作者のユーモアがあり、語られている「絶望」とは裏腹に、作品自体は明るく健康的である。そしてその(対比)の中に変わらぬ「私」、「ランドセル」を背負う「私」が立ち上がる。私(筆者)はその語り方に魅力を感じた。この小説は、出来事の語られ方に着目すべきだ、どのように語られているかという点にこそ、この小説の最も重要な部分がある——私はそう考えた。そこから私の美味しい小説の授業は始まる。

村上春樹「青が消える」の場合

村上春樹の短篇小説「青が消える」は、ソフトな管理が徹底し、人々の対社会的な不満が大きくなる前に、その不安の芽

が未然に摘み取られてしまう「もう一つの世界」を描いた小説で、短いながらも村上春樹らしいユーモアに満ちた小説である。管理社会には監視が付きものであるが、この小説に描かれた社会にはそのような露骨な監視はない。だが、「駅員」の応対に明らかのように、「中央コンピュータ」の支配は社会の隅々にまで行き渡っている。注目すべきは小説の結びの次の言葉である。

でも青がないんだ、と僕は小さな声で言った。そしてそれは僕が好きな色だったのだ。

誰も消えた青のことなんか気にしていない。監視され、管理されていることに気づいていない(少なくともそのように見える)。「僕」がそれに気づいてしまうのは、「僕」は「青」が好きだったからだ。「青」へのこだわりが、変化に気づかない人々の中で「僕」一人を目覚めさせている。二十一世紀型管理社会の到来を警告するという極めて政治的なテーマを扱いながらも、この小説が、PO Pな感覚、ある種の軽さを失わないのは、「不満を抱く存在」として、政治とは程遠い個人、「青」が好きな「僕」を置いたことよっている。「僕」はただ

「青」が好きなだけで、何か政治的な主張をしているわけではない。だが、好きなものを好きであると表明すること、好きであり続けられるということ、それ以上でもそれ以下でもないところに、管理的な圧力から身を守る最後の牙城があるのかも知れない。もしも「青が消える」が「赤が消える」であつたら、小説はたちまち政治的言説に飲み込まれ、小説としての足場を失っていたかも知れない。

時代への警告を発するにしても、作家には作家のやり方がある。アイロンがけをする「僕」の「青」への愛着とこだわりが、すべてを飲み込んでいこうとする巨大な力に対して、ささやかな抵抗を試みている。「壁と卵」の作家は、そのささやかな抵抗に寄り添い、味方しようとする。「壊れやすい卵」の側に立つのである。「青」への愛着は、かけがえのない個性への愛である。皆それぞれの「青」を大切にすべきなのだ。そしてアイロンがけを楽しむべきなのだ。そんなことを生徒に向かって話してみたい。

さあ、教室へ行こう。そこにもかけがえのない個性が待っている。私もまた、「卵」の側に立つのだ。

(やすだまさのり・名古屋市長立富田高等学校)

特集 文学教材で何を教えるか

抽象的思考につなげる文学教材指導

若松伸哉

一 文学教材を扱う目標

高等学校に限らず小中学校も含めた国語教育において、文学教材を扱った場合、その主人公や登場人物の心情を読み取ることが大きな目標の一つとなる。場面ごとの人物の心情を読み取りつつ、最終的には作品一篇のなかでの主要登場人物の心情変化を理解し、追体験することが児童や生徒には求められる。記述のなかに空白が多く、比喩表現などによって登場人物の心情を表そうとする文学作品を読むにあたって、書かれた言葉のなかから人物の心情を復元し読むことは言うまでもなく重要な学習課題であり、直接的に物事を表す機能的なツールとしての言語

の姿だけでなく、言葉のつらなりが一人の人間を、そして一つの世界を構築していくという言語のもつイメージの喚起力を感じるためにも重要なことだろう。

高校における国語教材においていわゆる〈定番〉となっている近代文学作品に、主要登場人物の心情が大きく変化する小説が多いのは偶然ではなく、以上のような事情が大きく関わっているはずだ。

二 〈他者〉の問題

芥川龍之介「羅生門」は高校国語教科書において圧倒的な掲載率を誇る、定番中の定番といえる文学教材だが、仕事で失った下人を主人公に、〈飢え死にか盗

みか〉という倫理的な命題を軸として、主人公の心情変化を追い、〈エゴイズム〉の問題に触れて終わるのが従来の一般的な授業の方向性といえる。

しかし、文学教材において、こうした主人公の心情変化を追うだけでなく、その心情変化に大きな影響を与える存在として〈他者〉の問題を考えてみるのも大きな意味をもつだろう。日常生活においても心情変化が閉じた個人のみで起こることは稀であり、それは人間の心情をリアルに描こうとする文学作品でも同様である。「羅生門」でいえば、下人の心情変化に大きな変化を及ぼすのは否定的な存在として登場する老婆であるし、中島敦「山月記」では友人・袁蓼との対話が、夏目漱石「こころ」ではKとの関係が、それぞれ主人公の心情変化に大きく関連している。

この〈他者〉は人間とは限らない。引き続き定番教材に即して言えば、志賀直哉「城の崎にて」では目撃する昆虫や小動物（の死）が、主人公の心情に大きな変化をもたらすし、太宰治「富嶽百景」では富士山という自然が、やはり主人公の心情に大きく関係してくる。定番となっ

うな〈他者〉の問題も一貫して見出せるのである。閉じた〈個〉ではなく、世界のさまざまな〈他者〉の網の目のなかで存在する人間の在り方。また、文学教材を通して考えることのできるこうした人間観あるいは世界観についての抽象的な思考は、評論分野で頻出する〈自己と他者〉の問題を含めた抽象的な議論を読み解くことにもつながっていくだろう。

三 〈語り〉を考える

もう一つ具体的な作品内容から出発して抽象的な思考に至る方法として、近代文学研究では一般的となっている〈語り〉分析に注目しておこう。文学作品に〈語り〉分析の視点を導入すると、言語によるさらに複雑な世界観の構築の様相がほの見えてくる。

「羅生門」は下人の心情の推移が非常にわかりやすく描かれるが、その物語を語っているのは誰なのか。それは〈語り手〉という存在にほかならない。そして注意して「羅生門」本文を見てみると、〈飢え死にか盗みか〉という問題を提示しているのは、下人自身の言葉ではなく、下人の心中を語る（ように見せている）

語り手である。そもそも「羅生門」の語り手は、冒頭近くで自ら「作者」と名乗り出るような過剰な振る舞いを行う存在でもある。下人の心情の推移を代弁的に語るような体裁をもちつつ、〈飢え死にか盗みか〉という倫理的な問いを読者に提示することに、この語り手の偏向性はないだろうか。作品末尾についても、今後の下人の行方を曖昧にしながら、その実、〈盗み〉を決意した下人を強く喚起させる意図的な語りになっている。

自分の価値観を強く読者に押しつけているこの語り手の姿は例えば、「〈飢え死にか盗みか〉の価値観を本当にもっているのは誰か？」という発問のほか、「作者」の作中への登場、「下人が雨やみを待っていた」という記述への自己言及、フランス語「Sentimentalisme」を平安朝の物語に使う等、語り手である「作者」が、自在にそして恣意的に物語世界を語る箇所が小説中に書き込まれている点に注目させることでも浮かび上がる。物語を〈語る〉ということは、語り手が必ず読み手という〈他者〉を想定して行う極めて対他的な意識の強い戦略的な行為でもある。「羅生門」の物語世界は、「作者」を名乗る語り手によって大きく

操作されているかもしれないのである。

四 具体的理解から抽象的思考へ

このように、物語世界は基本的に一人の語り手によってかたどられ表現される世界である。それは自分語りである一人称小説であれ、客観的な視点を装う三人称小説であれ、原理的には同じである。物語は語り方によって大きく世界が変わるのであり、世界の創出とその多様性・相対性の問題がそこには現れる。ストーリーに注目するだけでなく、物語をどのように語っているかに注目することによって、対象を指し示す機能的なツールとしてだけではない、言語―そして語るという行為―による世界の認識や構築に関する非常に豊かで興味深い機構へ思考をめぐらす入口が開かれるのである。

内容を確認するだけの文学教材の授業では、生徒にとつても取り組みが難しい。授業のなかで文学作品読解を具体的な出発点として、文学以外にも連動していくような、より深い人間・世界・言語についての抽象的な思考を生徒たちにも体験させる構えが必要ではないだろうか。

（わかまつしんや・愛知県立大学）

特集 文学教材で何を教えるか

詩の〈行〉を読む — 萩原朔太郎「旅上」 —

戸塚学

明確なルールを持たない日本の口語自由詩にも形の上での特徴がある。つまり形式である。形式に注目すると、詩の読み方が少し変わる。ここでは『明解国語総合』『精選国語総合』採録の萩原朔太郎「旅上」冒頭四行を取り上げ、形式に着目して詩を読む方法について考えたい。

旅上

萩原朔太郎

ふらんすへ行きたしと思へども
ふらんすはあまりに遠し
せめては新しき背広をきて
さまざまなる旅にいでてみん。

詩の形式の中で最も基本的なものは行

である。行は音や意味の連なりを区切り一定のまとまりを作る。あるまとまりと別のまとまりとの間には関係が生じる。順接や逆接、転換や対比などである。行に注目して読むとは、こうした行と行の間の関係性を読むことである。

だが行を意識して読むことは意外に難しい。前の行から次の行へと続けて読んでいくと行間をつい補って埋めてしまうからである。これは行を一連の文章の一部分として読んでいることを意味する。無意識に行を無化し、散文文化しているのである。文章を読むように詩を読む時、行という形式は見失われる。

一つ一つの行は一種の独立した断片である。その意味で行を意識して読むこと

は四コマ漫画を読むことに似ているかもしれない。私たちは四コマ漫画を独立した場面の連続として読む。状況が設定され、展開・転換・オチが来る。コマは自立しつつも前後のコマとつながりを持つ。詩の行もまた、自立する働きと前後とつながる働きをともに持つ。行を意識して詩を読むとは、このような行ごとの切断と連続を読むことにほかならない。

行を意識するために、私は後続の行を紙などで隠して詩を読んでみる。一行が一行読み終えるごとに次の一行を出して読む。行ごとの意味作用を可視化する。次の行が隠されると、ある行の意味作用が次の行でどう引き継がれるかという予期が生まれる。次の行はこの予期に対する答え合わせとして読まれる。隣接する二行の関係性が明確になる。

またある行の言葉がそこに初めて現れた言葉として読まれることになる。意味作用の働き出す瞬間が顕在化する。すると行と行の間に仕掛けられた驚きも看取される。行に注目すると、詩の言葉を新鮮な目で眺め、詩の言葉がイメージや観念を作り出す瞬間を捉えられる。

実際に行に注目して「旅上」を読んでもみよう。第一行は「ふらんすへ行きたし

と思へども」である。フランスへ行きたいという話者の願望が提示される。ここで次の行を読まずに立ち止まる。すると行末の「ども」が目にとまる。「ども」は逆接だから、「思うけれど、でも……」という意味である。そうなると第二行の展開が予期される。この話者の願望は叶わないはずなのである。

この予期を踏まえて第二行を読む。「ふらんすはあまりに遠し」と憧れが実現しない理由が示される。予想通りの結末で驚きがない。予定調和である。だがこの予定調和がここでは大切である。

第一行の「ども」により希望が叶わないことは織り込み済みである。だから第二行の「あまりに遠し」に暗さはない。フランスが遠くて行けないのは当たり前で、そのことは挫折の原因にならない。この明るい諦念を打ち出すために第一行の「ども」が効いている。明るい諦念だから第三行・第四行のような展開が生まれる。代替行為としての旅である。前半二行と後半二行の間にはちょっとした転換がある。第三行・第四行をいったん隠して読んでみるとよくわかる。第三行では「新しき背広」を「き」る行為が、第四行では「きままなる旅」に「い

でて」みる行為が提示される。フランスへの憧れから突然、背広であり旅なのである。これは出来事の展開として見るとそれほど自然ではない。フランスに行かないからという理由で新しい背広を着て旅に出る人は、現実にあまりいそうにない。つまり第二行と第三行の間には出来事の自然さに逆らった小さな飛躍がある。

だがそれだけでなく、ここにはイメージの転換が仕組まれている。前半二行と後半二行にそれぞれ現れる名詞を見ると、前半二行で反復された「ふらんす」が後半二行で「背広」「旅」へ入れ替わる。観念的なものから具体的なものへのイメージの転換である。このイメージの転換を行分けが支えている。そしてこの転換に伴い「ふらんす」に託されたまだ見ぬ空間への憧れは「新しき背広」に袖を通す時の期待感や緊張感へと転化される。このように、行に注目すると、第一行・第二行の間の予定調和が見える。また前半二行と後半二行の間の転換が見える。前半二行の予定調和が憧れを憧れのままに保ち、後半二行の転換が形を持たない心情を具体物のイメージへと転化する。こうして「旅上」は憧れという心情の純粹性を保ちつつ、そのうちにある情

熱や喜びをすくい取って、初春の旅の情景に鮮やかに昇華するのである。以下の詩行は、この旅のイメージをさらに「みづいろ」の窓の外の情景へと開いていく。このような言葉の働きの中心にあるのが、行という形式なのである。

行に注目して読むことは方法である。方法は別の詩に適用できる。ということでは一般化して教えることが可能なもので、読み手が自ら応用できるものである。

大学一年生向けの詩の授業で四行詩を行ごとにイメージ化して四コマ漫画にする作業をしたことがある。題材として工藤直子「のはらうた」を用いたが、授業のテーマは詩人や作品の特徴ではなく詩の行に置いた。個別の詩の解釈は経験としてなかなか積み重ねにくい。だが、方法は経験として積み重ねることができ。詩を読むには散文を読む時と異なる勘所がある。それは多く詩の形式に関わる。そうした詩を読む時の勘所を方法として伝えることで、日常的な言葉と異なる詩の言葉の魅力や面白さを味わう手段を読み手が自らのものとできるように思う。

(とつかまなぶ・常葉大学)

特集 文学教材で何を教えるか

お気に入りの一首を見つけ、それについて熱く語る授業を

千葉聡

一 一首をめぐって議論する喜びを

多くの生徒が国語の教科書を通して、初めて短歌に触れる。それは教員も同じだ。歌集は少数の自費出版が主流であり、なかなか書店に流通しない。与謝野晶子の何首かを知っている人はいるだろうが、『みだれ髪』を読みとおしたという人は、一体どれくらいいるだろうか。

「千葉さん、短歌って、どうやって教えたらいいの？」

よく質問を向けられる。私は二十代の頃から短歌誌「かばん」に所属しており、歌集を何冊か上梓している。それを同僚にも寄贈しているので、勤務校の国語科準備室内には「短歌のことは千葉に訊け」という雰囲気があるのだ。

「いやあ、私にもよく分かりません。授業では作品の意味内容を詳しく解説したりしますが、短歌も俳句も、『ここが面白いよ』と解説すると、逆に味気なくなってしまうことが多いですからねえ」

「そうだなあ。それでも授業では、何かそれらしいことを解説しないといけないんだよなあ」

われわれ国語教師たちはうなずき合う。「それにしても、千葉さんはなぜ短歌を詠もうと思ったの？」

放課後、多少余裕があるときには、こんなことを訊かれる。お茶の香りの向こうの同僚に、私は答える。

「もちろん、短歌を好きになったからですよ」

「どんな短歌が気に入ったの？」

「たとえば、穂村弘の『校庭の地ならし用のローラーに座れば世界中が夕焼け』とか。いい歌でしょう？」

すると同僚たちは「いいね。情景が目につかぶなあ」とか、「これだけだと、だれがやっている行為なのかが分からないよ」とか、さまざま意見を言ってくる。

「地ならし用のローラーなんて、今の生徒たちは知りませんよ」

「いや、分かるでしょ！ 歌の主人公の小ささと、世界の大きさを表現している、なかなか面白い」

「そうですか？ 『世界中が』なんて、大げさすぎについていけません」

「確かにそこは大げさ、というより大雑把だけれど、そのあとに『夕焼け』が出てくるのが、意外で面白いんじゃないかなあ」

そこへ生徒たちが、何かの用事でやってくる。

「なんだか盛り上がりすぎてますね。何を話してるんですか？」

「千葉先生、さっきの一首を書いてみてくださいよ」

連絡用のホワイトボードに、私がさつ

きの一首を書く、今度は生徒の一人が「いかにも青春って感じですね」と意見を述べたりして、さらに議論は盛り上がる。

これこそ、文学の喜びだ。国語教師も生徒も、一人の人間として、自らの感性を信じて、議論を繰り広げるのだ。意見を口にするだけで、本来の自分に立ち返る。ときに誰かと思いを共有できる。こういう心楽しいひとときを、授業中に持てないだろうか。

二 言葉にこだわりを持つこと

短歌をめぐる楽しい話し合いを生み出すには、まず意見を言いやすい雰囲気をつくるのが大切だ。教員が教科書掲載歌の解説をし、そのあとで「どう思いますか?」と言ったところで、生徒たちは、教師の気に入る無難な答えを返さないといけない、と思うだけだろう。そこで私は、作品そのものの力を信じて、授業で私が解説することなく、生徒たちに、自由に短歌を味わうようにさせてみた。『明解国語総合』所載の「遠い片手 短歌九首」には、ひとつのテーマのもとに三首が並べられている。

ふたり

対岸をつまずきながらゆく君の遠い片

手に触りたかった

永田紅

終バスにふたりは眠る紫の（降りますランプ）に取り囲まれて

穂村弘

夜が明けてやはり淋しい春の野をふたり歩いてゆくはずでした

東直子

ここに並んだ三首は、どれも歌の奥に、何か深い人間ドラマを隠し持っている。

だが、字面を追うと、どれも分かりやすい言葉ばかりだ。

そこで、生徒たちに訊いてみる。

「どの歌が気に入りましたか?」

作品の世界に深く入り込んでいなくても、三首のうちのどれか一つを挙げれば

いい。生徒にとっては楽な質問だ。「では、その歌のどんなところがいいと思ったのですか?」

これはやや難易度が上がる。だから、そつと助け舟を出しておきたい。

「その歌の中の、どの言葉をいいと思うのか、教えてくれればいいですよ」

短歌は磨き上げられた言葉の一連だ。だから、一首の中のどの言葉を取り上げても、格好がつく。生徒は、「永田紅の歌の『つまずきながら』という言葉にハッとしました」とか、「穂村作品の〈降りますランプ〉が印象に残りました」とか答えればいい。だが、こうして、形

式的でも「この歌の、この言葉がいい」と発言したとたん、人は魔法にかかる。

「自分はこれが好きだ」と認識することで、人はその歌に、歌の中の言葉に、こだわりや思い入れを持つようになるのだ。

また、言葉にこだわりを持つことで、人はその一首を深く読み解きたいという意欲をかきたてられる。生徒の口から、ここまで引き出すことができれば、授業は面白い議論に向けて動き出すだろう。

三 謎の含まれた一首を

前掲の「ふたり」三首のように、優れた一首は、ときに物語の一部のように見える。生徒たちは、歌の背景となる物語の全体像を掴むために、想像力を用いるしかない。

教室では、そんなふうには、想像力を用いたく刺激させられるタイプの、謎の含まれた一首を取り上げたい。その謎に向かつて、さまざまな意見が出されれば、議論は大成功であろう。

『明解国語総合』には、謎の含まれた短歌が多く掲載されている。どれも清新な現代短歌である。ぜひ、ご覧いただきたい。

（ちばさとし・横浜市立桜丘高等学校）

古典指導のヒント

「友情」のあり方から読む「木曾の最期」

小助川元太

一 はじめに

古典の授業は文法解説と口語訳だけのつまらないものだと思っている生徒は多い。そのような生徒たちに、古典文学の面白さを伝えたい。そこで、文法解説を最小限に抑え、授業の中心を作品テーマの考察に絞ってみてはどうだろうか。本稿では、「国語総合」の定番教材である『平家物語』『木曾の最期』を、生徒たちにとって身近なテーマである「友情」のあり方から読んでみたい。

二 「木曾の最期」で描かれる「友情」

「木曾の最期」は、栄華を極めた平家

一門を都から追い出し、一時は天下を取ったかに見えた木曾（源）義仲が、源頼朝の派遣した軍勢によって追いつめられ、討ち取られてしまう場面である。主従二騎となつてしまった義仲と今井四郎

兼平のやりとりが中心となるが、そこには当時の武士特有の価値観とともに、現代にも通用する人と人との心の絆が、簡潔な表現の中にも細やかに描かれている。絶体絶命となつた義仲と今井に残された道は、討ち死にするか、自害するかである。『平家物語』には、しばしば「名を惜しむ（＝不名誉を恐れる）」武士の姿が描かれる（たとえば、巻一一「弓流」では、戦の最中に海に弓を落としてしまった源義経が、弓の厄弱さを敵に

嘲笑されることを恐れ、命がけでそれを拾う姿が描かれる）。この場合、義仲が「名を惜しむ」ならば、最良の選択は自害することであつた。今井が「日ごろは何とも覚えぬ鎧が今日は重うなつたるぞや。」と弱音を吐く義仲を「御身もいまだ疲れさせたまはず。」と励ましたにもかかわらず、義仲がともに戦うことを望んだときに「御身は疲れさせたまひて候ふ」と相反する指摘をしたのは、義仲に自害を勧めるためであつた。そこから垣間見えるのは、ひたすらに義仲の名譽を守りたいと願う今井の「友情」である。

三 今井の立場になつて考えさせる

相手に自害を勧めることが「友情」であるというのは、現代を生きる生徒たちにとつてはやや受け入れがたい価値観かもしれない。だが、この時代、名のある武士が名もなき雑兵に首を取られることは、後々まで残る恥であり、名譽を保持するためには、討ち取られる前に自害する必要がある。このときの今井が最も恐れたのは、自分が大切に思う義仲が不名誉な最期を遂げ、後の世の者たちに嘲笑されることであつたのだから。

そうした背景を押さえた上で、生徒には、

「もし自分が今井の立場であったら、

1. 義仲の願いを聞き入れて、ともに討ち死にする。

2. あくまでも義仲に自害を勧める。

のいずれを選択しただろうか」

という発問を試みてみたい。

この場合、アクティブ・ラーニングを導入すると、より効果的である。アクティブ・ラーニングといっても、四〇五人といった小集団グループに分けて、それぞれの選択とその理由を発表させるという簡単な方法が良い。生徒同士の意見交換の中で、それぞれの考える「友情」のあり方の違いが見えたり、このときの今井の切実な思いに気づくことができたりするはずである。

このように作品で描かれるドラマを、自分たちの問題として読むことを通して、生徒たちは古典文学を読むことが決して無意味なことではないことに気づくはずである。

四 義仲の言動に注目させる

また、本場面では今井の言動のみに目

が行きがちであるが、より作品を深く読むために、義仲の言動にも注目させたい。

義仲の望みは、生死をともにすると誓い合った親友今井とともに死ぬことであつた。このときの義仲にとっては、名誉などどうでもよかったのである。それが今井の説得に応じたのはなぜなのかを考えさせてみたい。

具体的には、

「もし自分が義仲の立場であつたら、

1. 今井の説得に応じて、一人で自害に向かう。

2. 今井の説得に従わず、一緒に戦う。

のいずれを選択しただろうか」

という発問をして、小集団での話し合いをさせてみると、今井の義仲に対する「友情」だけではなく、義仲の今井に対する「友情」にも目を向けることができ、二人の「友情」のあり方への理解がより深まるであろう。

五 おわりに

よく「教科書の古典はつまらない」という話を聞く。たしかに教科書にはさまざまな制約があるため、掲載できる作品は限られてくる。しかも、古典の世界に

触れるためには、言葉の壁を乗り越えなければならぬという厳しい現実もある。

もちろん、自力で言葉の壁を乗り越えるためのスキル、すなわち文法や語彙を身につけさせることができれば、読めなかつたものが読めるようになるという知的な喜びを味わわせることもできるであろうし、文法的な違いが作品の重要な解釈に関わってくることに気づかせることもできるだろう。だから、品詞分解や口語訳のトレーニングが全く必要のないものだとは思わない。

だが、内容の面白さに触れることなく、そうしたトレーニングに終始するだけでは、生徒たちはますます古典から離れて行ってしまうだろう。

古典を読む楽しさは、今を生きる我々が、何百年も前の人と繋がることのできる場所にある。生徒たちに古典文学が読む価値のあるものであることを知ってもらうには、まず、それを扱う教員自身が「教科書の古典はつまらない」と決めつけずに、それぞれの作品に向き合ってみて、その面白さを発見する必要がある。それが古典嫌いの生徒を減らすための一歩となるのではないだろうか。

(こすけがわがんだ・愛媛大学)

古典指導のヒント

身近な事柄に引き付けて

瀧康秀

—漢文指導のヒント—

漢字ばかりで書かれている外国の古典を、アクロバティックに戻ったりしながら、慣れない古風な日本語に変換して読んでいく……漢文の授業には確かにそういうとっつきにくさがある。それはそうである。教材によっては、二千数百年前の、紀元前に遡る古代文明の産物であったりするのだから。

漢字は時代によって書体も意味もさまざまに変化しているし、漢文も、古代・中世・近世と、その文体を変えつつ今に至っている。古代になればなるほど、漢語も文体もシンプルだったのであり、だからこそ、早くからさまざまな注釈が生まれ、それ自体が学問の中心になってきたほどである。漢文と格闘して私も三十

年以上になるが、今でも漢文読解の難しさに直面してばかりである。

しかしながら、私は漢文学習の最初に、生徒とのやりとりの中で、いつも次のようなことを言っている。

「有名な四つの古代文明の文字で、今日まで生きながらえて使用されているのは、漢字しかないんだ。これは世界的に見ても、特別なことだとわかるだろう?」

『「論語」の「学而時習之、不亦説乎?」
「学びて時に之を習ふ、亦説ばしからずや」などは、高校はもちろん、中学の教科書にも出ているが、この「学而時習之 不亦説乎」という字句は、実に紀元前から変わっていない。キリスト誕生以前から変わらずに伝えられた字句を、日

本の中・高生は学べている!」

「それに、ほら朋美さん(仮名)。あなたの名前の「朋」は、『論語』の、さっき言った「学而……」の後に出てくる「有朋自遠方来、(朋の遠方自り来たる有り)」の「朋」だよ! 意味も同じだ。

君たちが自覚してないだけで、私たちの今日の生活・文化の中に、漢語・漢文が育んできたものがたくさんあるからこそ、こういう発見がいくらもできる。だから君たちは、世界的に見ても稀な、この特別な学習環境を生かさない手はない!」

日常、漢字と触れ合っている日本の中・高生は、今なお世界の中でも漢文と特別な近さにある。自分たちの文化の背景を知るためにも漢文は読まなくてはならない、とさえいえるほどだ。入門期の生徒には、漢文の、こういった身近さという側面をまず強調し、親しみやすい点の多くあることに気付かせていきたい。

とっつきやすさ、親しみやすさを感じさせる糸口としては、先の名前の例もその一つだが、今日の我々の文化とも関連し、身近にあるからこそ普段それと意識しにくい、漢字・漢語・漢文に関係する事柄に注目させるのも有効である。

『史記』「鴻門之会」「四面楚歌」は、教科書において不動の地位にある教材である。緊迫した人間関係が交錯して実にドラマチックな展開であり、簡潔で要を得た文体は読みやすく、学習に資する語法・句法も少なくない。時代背景も、秦末漢帝国成立前夜という、東アジア史のみならず、世界史上も極めて重要である。漢文学習には欠かすことのできない作品と言える。これを例に取ろう。

まず、「鴻門之会」に至る経緯について、リード文（解説文）を読み合わせるなどして触れておくべきだが、ここでは、世界史で必ず学ぶ始皇帝の統一事業のうち、文字について確認しておくことよい。各地でさまざまな書体が使われていたのを、始皇帝は篆書に統一した。この篆書は、日本の公的文書で今なお欠かせない印鑑の書体、印篆の元となったが、生徒の多くにはその認識がないので、知らせておきたい。二千年以上前の大業のささやかな余波は、こんな身近な所にまで及んでいたのだ、と。

さて「鴻門之会」では、(一)「沛公(略)謝曰……」、(二)「噲拜謝起……」、(三)「張良入謝曰……」と「謝」字が複数回用いられているが、その箇所を機に、

漢文中において一字で表現された語について、今日我々が用いる二字熟語に置き換えさせ、その意味を特定させるようにするとよい。古代に遡るほど漢語表現はシンプルであり、一字・一音・一単語で用いられることが多かった。時代が下るにつれ、「謝」ならその字義の中の三つ、ア「あやまる」、イ「礼を言う」、ウ「断る」を、それぞれ「謝罪」「感謝」「謝絶」などの熟語で表現し、意味をわかりやすく伝えるようになったのである。

※注(一)(三)がア、(二)はイの意味である。

もちろん、現在日本語となっている熟語と漢文中の熟語とは意味が微妙に異なる場合もあるが、漢和辞典で確認させつつ一字の語を身近な二字熟語に置き換えさせていく練習は、漢文学習において生徒の理解を大いに助ける。多くの漢文指導者が実践しているやり方である。「鴻門之会」では、ほかに(一)「厄酒安辞足」、(二)「今者出未辞也」、(三)「大礼不辞小讓」、(四)「何辞為」、(五)「不能辞」と、「辞」も頻用される。この字も多義であり、ア「断る・やめる」、イ「気にかける」、ウ「別れを告げる」などの意味があり、アでは「固辞・

辞任」、ウでは「辞去」などの熟語が思い浮かぶ。身近な熟語に置き換えられる場合は、ぜひ生徒に発見させたい。

※注(一)がア、(二)(四)(五)がウ、(三)がイである。

ちなみに、「鴻門之会」の段階では「沛公」と称された劉邦であるが、「四面楚歌」において項羽軍を取り巻くのは、劉邦の指揮する「漢軍」である。つまり劉邦は漢王になっている。沛公は、項羽に与えられた狭隘な盆地に過ぎなかった漢中に拠点を置き、漢王と称したのである。後に項羽の楚を破り、天下を平定した漢王・劉邦は、新帝国の国号をそのまま漢とした。短命に終わった秦と異なり、この漢帝国が前・後四百年に亘って存在したため、漢こそ、二〇世紀初頭にまで至る中国諸帝国の基本形を築いたといえる。だからこそ、我々が使う字は「漢」字なのである。従って、「鴻門で沛公が項羽に切られ、項羽の楚が磐石の帝国となっていたら、漢字は、なんと楚字と呼ばれたかもしれないよ。」と、私は歴史の「もしも」を生徒に語ったりする。これも、漢文を少しでも身近に感じてもらうための方便である。

(たきやすひで・清泉女学院中学高等学校)

「伝える」を「伝える」に

—全国高校ビブリオバトル二〇一四

澤口哲弥

1 初の高校生全国大会

ビブリオバトルがにわかには活気づいている。読んで面白かった本を五分間で紹介し、聴衆に最も「読みたい」と思わせた本が、「チャンプ本」として選ばれるゲームである。

その全国大会（活字文化推進会議主催）に今回参戦した。大学生の大会はこれまでにあったが、高校生の全国大会は初めてである。二〇一五年一月十一日、よみうり大手町ホールに全国八ブロックの予選を通過した十六名の「バトラー」が集った。

津西高校からの参戦者は二年生のS。『絶叫仮面』（作…吉見知子 絵…平山けいこ）を携えて参戦である。二〇一三年度からビブリオバトルの校内大会を開催している本校では、すでにコアな愛好者が育っているが、彼はその中心人物の一人である。予選は四つのブロックに分けられ、プレゼン5分＋質疑応答2分の計7分〔決勝は質疑応答が3分で計8分〕。ジャッジをするのは団扇を挙げて意思表示〔決勝は投票〕をするすべての聴衆である。さすがに百戦錬磨のバトラーたち、堂々とした戦いぶりであった。「会場の年齢層が高かったですね」とのSのことば通り、出版業界や教育産業関係の方々なども聴衆として紛れ込んでいる気配であった。その中で高校生が笑いも取るわけだから、やはりツワモノの集まりである。

予選を勝ち抜いた本は、『わたしが正義について語るなら』（やなせたかし）、『恋文の技術』（森見登美彦）、『結構相手は抽選で』（垣谷美雨）、『冷たい校舎の時は止まる』（辻村深月）。学校の先生が選書したらこうはなるまいという、「生徒の生徒による生徒のための」選書の妙。これがまたビブリオバトルの愉しみでもある。

2 ビブリオバトルの指導

自分の好きな本を紹介するから簡単と思いきや、やってみると結構これが難しい。

生徒は、往々にして五分間の構成ができず、時間を余らせたり、不足させたり、話をねじらせたりを繰り返す。時系列で話すのが原因だが、この場合は、なるべく構造化して話すように、図化等を取り入れ指導をする。また、「面白い」などの安易なことばを

使わず、面白いと聴衆に思わせる、表現を編み出させる指導をする。選書に関しては、これはもうビジネス講座である。どこに商機があるかを対話しながら決定していく。

Sは終了後「先生、やはり選書で半分は決まりますね」と総括した。なるほど、結果的には「話しぶり」よりは本の中身で勝負が決まったように思う。聴衆をあらかじめ予測した効果的な選書が、こと大会においては重要なようだ。あとは、聴衆の「既知の中にある未知の扉」をうまく開けば、たいていはあたりがつく。

3 ビブリオバトルと国語科

ビブリオバトルは本を通して人がつながることに意義を置くゲームである。その趣旨やルールの詳細については「ビブリオバトル普及委員会」のホームページで確認できるので、ここでは国語科における学びとの絡みでその意義に触れてみたい。

説得コミュニケーション論の観点から見て、ビブリオバトルには、①選書、②情報の統合と解釈、③聴衆の想定、④言語表現の四つのストラテジー（戦略）があると考えている。聴き手を「読み」ながら説得を目指す、総合的戦略である。同じ本を紹介するのでもブックトークとの違いはここにある。一方的に「伝える」ことから効果的に「伝える」ことを目指すという、かなり明確な目的性があるのだ。

例えば、「泣けて仕方がない本」と強調するより、「泣くのが見られなくなればひとりで読め」と紹介したほうが効果はあるだろう。また、作品のどこを切り取って紹介するかで聴衆の興味関心にも差が出るだろう。予選ブロックを通過した『わたしは正義について語るなら』のプレゼンでは「正義」の意味を話題の中心としたこともあって、「年齢層が高かった」方々の琴線にうまく触れている様子であった。

私たち教師は、ともすると国語の授業で、「読むこと」と「書くこと・話すこと」とを分けて考えがちである。しかし、ビブリオバトルの指導では、それらの連関を強く意識させられる。なぜなら、論理的な文章にせよ文学的な文章や韻文にせよ、そこにある「伝える」ためのレトリカルな戦略を「読む」ことは、巡り巡って、ビブリオバトルなどの表現活動で活かされ、逆にまたその表現活動は「読む」場面において、書き手の戦

略を意識化し分析できるという形でつながり、フィードバックされるからである。

ビブリオバトルに親しむメンバーたちの多くは、現代文の授業でこういった読解や表現に精通し、より深く読み、表現する学習者へと成長してきた。

従来の枠組みにない、領域を横断した新たな可能性をビブリオバトルは秘めている。

4 図書館主催ビブリオバトル

最後に、身近な実践例として本校図書館でのとりくみについて紹介する。

津西高校では、図書館行事としてのビブリオバトルをこの二年間、十二月の考査明けの放課後に図書館を会場に実施してきた。集うバトラーは約九名。聴衆は毎年七十名ほど訪れる。バトラーにエントリーするのは、授業においてひたすら考え、話し合うことを好む面々である。所属の部活は、演劇部、文芸部、邦楽部から剣道部などの運動部と幅が広い。彼、彼女らをあえてカテゴリー化すれば、既存の学校教育に飽き足らない人びと、ということになるのか。聴衆はみんな、寄席やライブハウスに来る感覚でやってくる。質疑応答の二分間は質問が絶えず、会場のマイク係は大忙しである。

ビブリオバトルはもともと大学のゼミで始まったという。ゼミ生が本（文献）を紹介するときに時間制限を設けたら楽しくなった、というのがことのきっかけらしい。したがって、本来、ビブリオバトルは大人数での開催よりは少人数が適している。筆者は国語表現の授業で実践してみたが、十一名しかない講座ゆえに、それはそれで和気あいあいとしたビブリオバトルができた。しかし、公共性や社会性の観点からすると、ある程度の人数、しかもハイコンテクストな（共通の文脈をもつ）関係にない他者に対してプレゼンをするほうが教育的効果は高いと考える。放課後の図書館行事はその点でバランスが取れているのだろう。

ちなみに、ビブリオバトルには原稿棒読みはできないというルールがある。「伝わる」（相手の心に響く）ことを目的としている証ともいえる、ツボを押さえたさりげなくも重要なルールである。

（さわぐちてつや・三重県立津西高等学校）

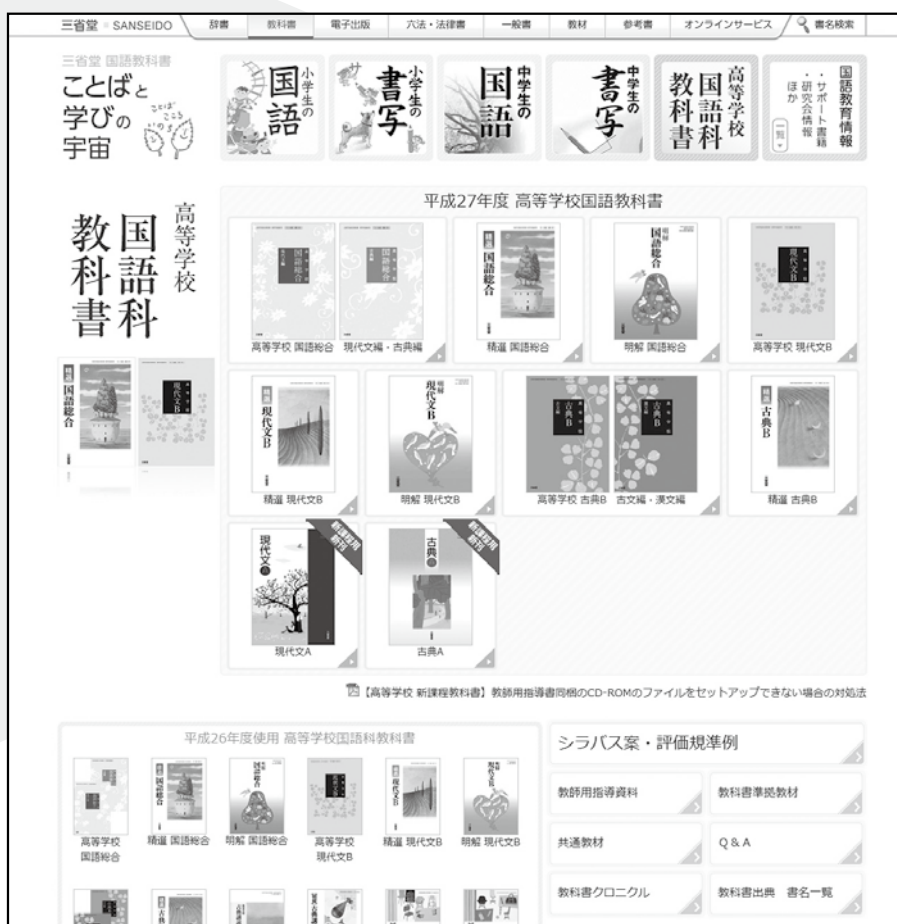
三省堂 高等学校国語教科書ウェブサイトのご案内

★ 新課程全教科書のシラバス案
と、全教材の評価規準例の
閲覧・ダウンロードが可能！

※ワード・一太郎・PDF版をご用意。

★ ウェブ限定の授業案も
掲載！

※閲覧にはパスワードが必要です。
※一部、掲載のない教材があります。



★三省堂国語教科書ホームページ「ことばと学びの宇宙」

<http://tb.sanseido.co.jp/kokugo/>

※「三省堂国語教科書」で検索

三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14 ☎03(3230)9556(営業)
☎03(3230)9411(編集)

- 大阪支社
- 名古屋支社
- 九州支社
- 札幌営業所

〒530-0002
〒460-0008
〒810-0012
〒060-0042

大阪市北区首根崎新地 2-5-3 ☎ 06(6341)2177
名古屋市中区栄 3-25-43 瑞穂ビル4F ☎ 052(252)9211・9212
福岡市中央区白金 1-3-1 ☎ 092(531)1531・1532
札幌市中央区大通西15丁目 2-1 ラスコム15ビル3F ☎ 011(616)8722

『三省堂全訳読解古語辞典〔第四版〕』を引いて
和歌を作ってみよう!

昔から人々は、相手に伝えたい自分の気持ちや感動を、
さまざまな工夫を凝らして三十一文字で表現してきました。
あなたも古語辞典を片手に、和歌作りにチャレンジしてみませんか。

歌 題

題詠：「もみぢ」

「もみぢ」を題にした歌を、なるべく多くの古語（『三省堂 全訳読解古語辞典〔第四版〕』に載っている語）を用いて、五・七・五・七・七の形式で詠んでみましょう。また、歌を詠むきっかけとなった出来事やエピソードを100字程度で紹介してください。

応募期間

2015年4月20日(月)～2015年11月20日(金)
消印有効

賞 品

優秀賞・・・3名（賞状・図書カード1万円贈呈）
入選・・・3名（賞状贈呈）
団体賞・・・10校（賞状贈呈）

応募方法

専用の応募用紙をダウンロードしてください。
詳細は以下の特設サイトをご覧ください。

<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/dicts/topic/wakakon>



【応募先】

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14
株式会社三省堂「三省堂 高校生創作和歌コンテスト」作品募集係
お問い合わせ：TEL 03-3230-9553（受付時間9:00～17:00 ※土・日・祝日を除く）

2015年度

三省堂 高校生創作和歌
コンテスト
作品募集!

三省堂高校国語教育 2015年夏号

6月15日発行 定価100円(本体93円)

〔編集・発行人〕 北口 克彦
〔発行所〕 株式会社 三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2丁目22番14号
電話／03(3230)9411(編集) 振替／東京00160-5-54300